資料 4

2020 年を見据えた今後の取組

昨年度の委員会（第 7 回）において、2020 年の具体的な取組及び成果を発信する仕組みについて議論。そのご意見を踏まえて、幹事会、運営部会において議論を進めてきたところ。

1. 2020 年の具体的な成果

＜幹事会・運営部会で議論した事項＞

- 「愛知目標１」を柱としつつ、①UNDB-J としての成果、②UNDB-J 構成団体による成果、③UNDB-J 以外の団体等による成果について整理。
- 部分的に定量的な評価も活用しながら、総括的に定性的に整理。
  （成果の概ねのイメージを想定しつつ、その根拠となるデータについて、各々の取組と個別の調査を基に取りまとめて成果を作成）
- UNDB-J のロードマップの目指すべき社会像を踏まえて整理。

→　具体的な成果の内容については、今後関係団体と連携しまとめていく。

2. 成果を発信する仕組み

生物多様性 COP15 に向けて成果を発信する仕組みについても検討が必要。

＜前回（第７回）の委員会における提案＞

- この 10 年で、クロージングイベントを 1 回だけやるのでは語り尽くせない取組が生まれているのではないか。
- 2020 年の 1 年間を通して、全国各地で、成果（聖火）リレーのように日本各地の成果報告をつないでいき、最後に COP15 の中国にも持って行って発信し、COP15 で生まれた新たな枠組みを日本に持って帰ってくる。
- これら一連の取組を、できれば世界を巻き込んでやれないか。

→　発信の仕方については、更なる議論が必要

■「2. 成果を発信する仕組み」について

〇趣旨

・ 愛知県名古屋市で開催された生物多様性条約 COP10 において、日本から「国連生物多様性の 10 年 2011-2020」を提案（国連総会で採択）。2011 年に設立した UNDB-J では、多様な機関が連携して愛知目標の 1 の達成に向けた取組を推進。
・ その結果、未来につながる多くの成果が着実に日本国内に生まれている。
・ 愛知目標の最終年である 2020 年秋頃に中国で開催される生物多様性条約 COP15 に向けて、この 10 年間の成果を広く共有・発信することで、さらなる行動の広がりにつなげていくために、UNDB として成果リレー(仮称)を提案し、日本全国に参加と協力を呼びかける。

〇リレーの概要

・ 2020 年 1 月から生物多様性条約 COP15 までの間に、日本国内で生物多様性の恵みを感じるイベントや生物多様性の 10 年の取組成果に関するシンポジウム等からなる生物多様性リレーイベントを多様なセクター・地域と連携して連続開催。
・ UNDB-J がイベントの成果をまとめた上で、COP15 でアピールし、その結果（成果）を日本国内にフィードバックする。
・ リレー実施にあたっては、全国から広く参加を募り、事前登録や結果報告をお願いする。

〇本日の議論

・ 扱うべき共通テーマは。(10 年の成果、次の 10 年に向けた課題　等)
・ どのような団体のどのような取組を対象とすべきか。
・ リレー参加の呼びかけ手法　等